

## 防災分野での地名活用の一例

地名とは土地に付された名称であり、広義には地理的な全ての存在に対する名称の総体で、自然地名と人文地名に区分できる。

地名の研究は19世紀から20世紀にかけて欧州で発達し、日本でも吉田東伍や柳田国男の研究で広く注目されるようになった。

近年、地理学・歴史学・民俗学・言語学などによる学際的研究が進みつつあり、地名研究は広がりを見せている。

また、地名は減災の観点からも注目されており、土地の成り立ちを考察（分析・評価）することで、防災分野での活用が期待されている。

## 1. はじめに

人間の名前には由来・由縁があり命名した人の思いが込められている。

同じく地名にも付けた人間の意識が込められている。

例えば、「けくら（花倉）」とは異常現象が発生して土地が消え去る意味であり、土石流や洪水は、「りゅう（龍）」に喩えられる。水の出る場所の意味もある。また、「ひら」＝平らと思われるが、傾斜地・急傾斜地・崖の意味とされ、付近の土地や崖下の平地などにつく地名である。

これらの地名と過去に発生した災害を比較すると、平成5年8月6日の豪雨災害（8・6水害）では、花倉地区、竜ヶ水地区で土砂災害が発生している。また、昭和51年7月10日には、平之町で城山の崖が崩れる被害が発生した。この様に地名と災害には密接な関係があり、地名を分析・評価することで、失われた過去の地域や社会の様子を考察できる。

## 2. 土地の呼び方について

地名は土地に付された名称で、川や海の名称、商業施設・駅・城郭など地表面に一程度の面積を占める施設の名称も含むもので、自然地名と人文地名に大別できる。

### （1）自然地名とは

山・川・海などの自然的環境を表す地名のことである。

地名の大半は自然地名である。特定の場所を表す際に、地形から土地の名前を付けたことにより、山・川・野原・坂・谷・海岸・岬といった地形に関する地名が多い。

水に関する自然地名	
区 分	意味等（具体例）
川	大川・小川・川上など、自然地名の中でもとくに多い。 河合（川合）・落合・相川は、二本の川の合流点のこと。 古川 → かつての川の流路（旧河道）のこと。 新川 → 付け替え後の河川のこと。 瀬 → 川の流れが緩やかで遅い地点（濁り → 淀、濁川） 瀬 → 川の流れが速い地点
沢	窪んでいて、草の生えている湿地や山間の源流に近い谷川の意味である。軽井沢は、涸沢（かれさわ）が転訛したもの。
清水	地面や岩間から湧き出る澄んだ水のこと。湧水も同様の地名
牟田	草が茂っている沼の意味で、水が近いところのこと。（無田）
鶴	○鶴 → 川の曲流部の小平地や旧河道（流路）を指す。川の近くや水上交通の要衝でも確認される。

地形に関する自然地名	
区 分	意味等 (具体例)
島	<p>周囲を水に囲まれた陸地のこと。周囲から孤立した狭い土地や若干高い微高地を指すこともある。</p> <p>微高地は水害の危険性が低いため、早くから集落化された。</p>
野 原	<p>野と原は同じ意味で使用される場合が多い。草などが生えており、自然のままの広い平地のこと。</p> <p>一般には</p> <p>野 → 山に多少近い傾斜地、集落からやや離れた所である。</p> <p>原 → 平らで集落のそばに位置する所である。</p> <p>鹿児島では、台地上の平坦地を原（バル・バイ）と言う。</p>
山	<p>平地よりも高く隆起した地塊のこと。</p> <p>谷と谷に挟まれた凸起部のこと。</p>
丘 (岡)	<p>岡 → ヲ (峰) カ (所) の意味であり、土地の小高い所、低い山、小山を指す。日本では山と岡に明確な区分はない。</p> <p>最も低い山は、大阪市の天保山 (標高 4.53m) である。</p>

その他の自然地名	
区 分	意味等 (具体例)
アイヌ語	<p>前近代に「蝦夷地」と呼ばれた北海道では、先住民族・アイヌの人々が住み、独自の文化・言語が涵養された。</p> <p>北海道の地名の多くは、アイヌ語の地名を漢字に置換又は転訛したものである。一例として、登別 (ヌプルベツ (色の濃い川))、札幌 (サツ・ポロ (乾いた・大きい)) がある。</p> <p>一方で、北海道には本州の地名が付いた場所がある。明治の時代に本州から移住・開墾した人達が、故郷の地名を命名したものと考えられている。</p>
琉球語	<p>近代初頭まで琉球王国であった沖縄県には、琉球語に因んだ自然地名が多く存在する。一例として、今帰仁 (ナキジン) は、良い漁場を示す魚来住 (ナキズミ) が転訛したもの。</p> <p>那覇も漁場の意味である。また、摩文仁は、崖を指す古語で「まぶ」+何らかの傍を表す「に」に由来する。</p>

## (2) 人文地名とは

土地の歴史 (人間の活動) に関係する地名であり、行政地名 (自治体名称) を含む地名である。

人物、職業、企業に因んだものや、政治的理由で地名が変更された事例もある。

<b>人文地名</b>	
区 分	意味等 (具体例)
人物関係	<p>〇〇新田など、前近代に土地を開拓し、田畑を開いた人物の名前を付して新開地の地名としたもの。            新開地は、新開・開・新地などと呼ばれる。            一例として、鴨池新田・五郎兵衛新田など。</p>
職業関係	<p>近世日本では、全国各地に大名が城郭と城下（城下町）を建設、周辺の町場などから商工業者を移住させて形成した。            業種の名前が地名化したのが、現在でも旧城下町に存在する。            一例として、旅籠町・呉服町・鍛冶屋町・塩屋町・魚屋町・紺屋町・柳町・鷹匠町など。同業者町とする説と町の代表的な業種に因むとする説が存在する。</p>
企業関係	<p><b>豊田市の事例</b>            かつては、拳母（ころも）と呼ばれた旧城下町に豊田自動車に関する企業や工場が数多く建設され企業城下町化した。            昭和34（1959）年には拳母市から豊田市に市名が変更された。            この背景には、近代には製糸業が盛んであったが、昭和初期から自動車産業が勃興、近隣の刈谷で操業する豊田自動織機の自動車製造の工場を昭和13（1938）年に拳母市側に誘致することになり、豊田自動車の本社工場が完成したことが発端となった。  <b>恵比寿の事例</b>            エビスビールを製造・発売していた日本麦酒造会社（現在のサッポロビール）の工場に隣接する山手線上にあったビールの出荷専用貨物駅「ゑびす」（のち恵比寿）に因んでいる。            駅が開設された当時の地名は「下渋谷」であった。のちに工場周辺を「ゑびす」と呼び、駅周辺の地名も恵比寿へと変化していった。（下渋谷 → ゑびす → 恵比寿）</p>
政治的理由	<p>明治2（1869）年の版（土地）籍（人民）奉還により、大名による藩領統治から中央集権的な国家に移行したが、同地名では混乱・誤達が生じる原因となるため、地名の改変が断行された。            府中は、古代・中世の地方における政治の中心である国府に因んでいるが、全国各地に存在しており、明治初年に各地の府中が改名された。現在では、東京都と広島県に府中市名が残る。            常陸国府中 → 石岡      周防国府中 → 防府            甲斐国府中 → 甲府      長門国府中 → 長府            駿河国府中 → 静岡      対馬国府中 → 巖原            また、現在も市町村合併で行政地名の変更が実施されている。同規模自治体の合併では、旧名の一字を取り合って合併して自治体名とする例（合成地名）や郡名などの広域名称、地理的位置を新自治体名に採用した例も見られる。            始良市・曾於市（旧郡名） 霧島市（広域名称・霧島山）            四国中央市（四国北部の中程に位置）            南九州市（九州島の南端に位置）</p>

### 3. 災害に関係する地名について

自然地名とは、山・川・海などの自然的環境を表す地名のことで、地形に因んでつくられる特定の場所を表す地名でもある。

これらの地名と災害の関連性について、調査の先行事例を活用して整理すると概ね次のとおりである。

自然地名の読みと起こり得る災害	
災害区分	自然地名の読み(漢字)
① 水に関係する災害	クボ(久保・窪)、カモ(加茂・鴨)、ナミ(波・浪)、イケ(池)、イナ(猪名・伊奈・稲)、ハタ(端)、フクロ(袋)、エ(江)、ウキ(浮・宇喜)、ウラ(浦)、カマ(鎌・釜)、ミノ(美濃・箕面)、アイ(合・相・会・英)、ワダ(和田)
② 土砂に関係する災害	キリ(切)、マヤ(摩耶・眉・迷)、アユ(鮎)、アリ(有)、アラ(嵐・荒)、イモ(芋)、オガ(小川・男鹿)、クワ(桑)、サル(猿)、ハナ(花)、シギ(嶋)、トリ(鳥)、ナギ(薙・那岐)、ワシ(鷲)、オリ(折)、ムギ(麦・牟岐)
③ 水や土砂に関係する災害	ツル(鶴・都留・水流)、ナダ(灘・名田)、アシ(足・芦)、アカ(赤)、アオ(青)、マイ(舞・米)、クラ(蔵・倉・桜)、タキ(滝・多気・多喜)、イタ(板・伊丹・井田・潮来)、ヤ(矢・八)、ヤシキ(屋敷)、ヤギ(八木)、クマ(熊・球磨・久万)、ジャ(蛇)
調査の先行事例、引用・参考文献	
調査の先行事例：宝塚市立長尾小学校教材 ①武光誠『地名から歴史を読む方法』河出書房新社 ②谷川彰英『地名を生かす社会科の授業』黎明書房 ③遠藤宏之『地名は災害を警告する』技術評論社 ④太宰幸子『災害・崩壊・津波 地名解』彩流社 ⑤青柳正樹『怖い地名 幸せを呼ぶ地名』ベストセラーズ	

水に関係する災害とは、洪水、冠水、浸水、高潮、津波を意味している。

また、土砂に関係する災害とは、土石流、がけ崩れ、地滑りを意味している。水や土砂に関係する災害とは、水害と土砂災害の両方に属していることを意味する。例えば、ツルは、鶴・都留・水流の漢字があてられ、水路のある低地を意味する。一方、傾斜地の場合は地すべり地を意味する。

災害別の自然地名 (ベン図)	《注意点》
	<p>身近な地域でも起こり得る自然災害に備えるためには、土地の特徴と災害との関連について知ることが必要である。</p> <p>この際、漢字から考えると本来の土地がもつ意味にたどり着けない場合がある。</p> <p>このため、基本は音(読み)から考える必要がある。</p>

#### 4. 身近な地域の地名（地名の由来）について（栗野郷土史より）

古い歴史を語り、我々の祖先と共に生きてきた由緒ある地名の由来を知ることによって、集落の成立や推移の様相などの特質を類推できる場合が少なくない。（ただし、地名は明治12年の地租改正地引絵図作成の時に命名したものが多く、これによって集落の性格や史実を簡単に断定することは避けるべきである。）

栗野地域の主な地名の由来は、次のとおりである。

地名	地名の由来（意味等）	地名区分		
		自然地名	人文地名	
栗野	高千穂の楼触（クシフル）岳の北麓にあるので、略して区兎野といったのを、後栗野となまったのか。	○		
木場	後川原	昔、川内川の川原（コラ）であった。	○	
	砂走	城山の砂が雨の度に流れ出す。	○	
	宮前	勝栗神社の前にある。		○
	瀏子山	殿様使用の鞭を出したとの説あり。（鞭子山）	○	
	本城	松尾城に関係する。（本城・内堀・外堀）		○
	上人カ宇都	偉い上人が住んでいた。		○
	十三塚	猪狩人の供養塚であった。		○
	長谷	湯谷川が長い峡谷を作る。	○	
	牧野	文字通り牧野であった。	○	
	老谷	古くから浸食されて谷を作る。	○	
	古城	昔松尾城の出城があった。（古城・上古城）		○
	佃	荘園の領地のこと。		○
米永	宮脇	神社の脇のこと。		○
	遠目ガ尾	松尾城の遠目番所があった。		○
	古川	昔、川内川が流れていた。	○	
	川原田	昔、川内川氾濫で荒らされた川原であった。	○	
	鐘月	鐘つき堂のあったところ。		○
	大迫	〇〇迫は、シラス土壌のため浸食を受けている。	○	
	別府	荘園時代国府の許可なく、開墾した地名のこと。		○
	会田	せまい田が出会っているところ。		○
	猿喰	浸食されたところ。（猿は崩れ、喰は浸食の意味）	○	
	芹牟田	芹が多く牟田地であった。	○	
	山ノ神	山ノ神を祭ってあった。		○
	王の山	金が出る宝の山のこと。	○	
恒次	牛瀬戸	牛を引いて瀬戸を通ったことから呼ぶようになる。		○
	蛭牟田	蛭の多い牟田のこと。付近はマムシも多い。	○	
	新竿	川内川の蛇行で新しく竿を入れてできたところ。		○
	二渡	対岸より二度渡ったことから。		○
	前田	前の美田から。		○
	御前野	曾我兄弟の母親、虎御前の着いたところ。	○	
北方	陣岡	古戦場の跡であった。	○	
	宇都	狭くて奥深い谷迫の入ったところ。		○
	正階寺	寺の後に五輪のかげら数基がある。		○
	寺山	寺の領地のこと。（正階寺の領地）	○	
	関	昔、川内川に関をかけ柵を守ったところ。		○
	大牟田原 柵	川内川を通じた原でよく浸水する低地のこと。 武家屋敷でクワキという。	○	○

地名		地名の由来（意味等）	地名区分	
			自然地名	人文地名
北 方	宮下	大神神社の下の部落のこと。		○
	老神原	老神神社のあったところ。	○	
	京田	読経料として寺に寄進された田のこと。（砂地）		○
	小屋敷	古い屋敷の意味である。（小は古の転訛か。）		○
	田尾原	塔ノ原の転訛（鶴田山を中心とした石塔群の地）		○
稲 葉 崎	鬼の辻	盗賊（稲葉小僧次郎吉）が活動した場所のこと。		○
	保木山	浸食された山のこと。	○	
	クツワ	亀の甲のひび割れのついた大きな岩がある。		○
	鷹巢	一帯は稲葉崎の放牧場で昔の鷹狩りの場所か。		○
幸 田	陣越	古戦場の跡であった。（陣越・陣岡・小陣）		○
	茶屋本	大口街道休息の茶屋があったところ。（旧道沿い）		○
	高山・登	地租改正の絵図画作成者の名前のこと。		○
	狩集	狩人が集まったところ。		○
	鉄山	島津氏が鉄砲をひそかに造ったところ。	○	
	九朗太郎	昔住んでいた兄弟（修験者）の名前から。		○
	水車	金鉱石を砕いた水車跡のところ。		○
	新番	金の取り締まりにできた新しい番所のこと。		○
	狩野	国有林で猪が多い。（狩野・猪ノ垣）	○	

## 5. 身近な地名と災害との関連性について

災害との関連性の分析・評価は、主に現在の地形の特性を考察して判断したが、字絵図にハザードを重ねてみると、第3項（災害に係る地名について）及び第4項（身近な地域の地名について）の内容について概ね対応していることが解る。

地名		地形の特性	災害との関連性	
			水害	土砂災害
木 場	本城	高台に位置するが平地との境には急峻な崖がある。	—	○
	内堀	崖の近くに位置する。	—	○
	尾鉢	谷の出口で湯谷川に沿った場所には崖がある。	○	○
	亀沢	小河川が流れ低地に位置する。周囲に崖がある。	○	○
	砂走	大雨の時には山から砂や小石が流れ出る。	○	○
	淵ノ子山	諏訪の台に接続する林地で崖がある。	—	○
	原田	川内川流域に沿った低地である。	○	—
	屋根添	小河川（水路）が流れる低地である。	○	—
	有次	諏訪の台に接続する林地で崖がある。	—	○
	諏訪	高台に位置するが平地との境には急峻な崖がある。	—	○
	上五反田	川内川流域に沿った低地である。	○	—
	丸山	丸池（丸池川）周辺で小高い山がある。	○	○
	五反田	川内川流域に沿った低地である。	○	—
	田中	小河川（丸池川）が流れる低地である。	○	—
	柏木	小河川（丸池川）が流れる低地である。	○	—
	中水流	川内川流域の低地である。（流れが蛇行する付近）	○	—
	宮ノ前	小河川（丸池川）が流れる低地である。	○	—
後川原	川内川流域の低地である。（流れが蛇行する付近）	○	—	

詳細は、別図「字絵図とハザードマップの比較」参照

## 6. まとめ

気象災害のリスクが高まった際に危険な場所に居住する住民は、被害を受ける前に安全な場所に避難すべきであるが、自治体からの避難情報（高齢者等避難又は避難指示）を受けても、多くの住民が避難しないケースが見られる。

住民の避難行動に結びつかない原因としては、避難情報の精度の問題やこれまでのハード対策に対する安心感、個人や組織の防災意識が低下する等、心理的作用が総合的に関与しているものと考えられる。

そこで、土地の成り立ちを理解することが重要になるが、地名はその土地の特徴等を知る手がかりとして、大変重要な手段（ツール）である。

字絵図とハザードマップを比較すると、明らかに地名と災害には密接な関係があり、身近な地域の地名を分析・評価することで、失われた過去の地域や社会の様子、即ち地域の持つ潜在的な災害のリスクを理解できる。

栗野駅周辺の絵図等を活用して、地名と災害の関係を具体的に記述したが、これらの資料を他の地域に応用することで、自主防災組織などの活動の一助となることを期待したい。